

生意気畜生美少女合闘



むにむにっ！



はじめに

初めまして、序文の執筆を賜りましたネオちゃっぶと申します。よろしく願います。

尊敬している創作者さん達からこのようなお声掛けをいただいた事がとても嬉しく、慣れないながらも頑張って文章を書いています。

きっとこの企画でも参加者の方の素晴らしい作品が見られるものと思い、大変楽しみに思っています。

さて、今回の主役のむにですが、ゆに様のビジネスコウモリとして最初期からビジュアルが存在したとはいえ、キラクターとして誕生したのはおよそ1年後。

それから早2年の時が経ち、いつの間にやらかした企画がなされる程の魅力を持つキラクターに成長しました。一体むにの何がそこまで我々を惹きつけるのでしょうか？

色々要因はあるでしょうが、ひとつには眷族との不思議な関係性が挙げられるように思います。

我々はゆに様の眷族でありゆに様は主になる訳ですが、それじゃあむには……？友達？相棒？同僚……？

イマイチしつくり来ないけれども同僚は少し掠めてる感じがします。同僚兼プロレス相手というのが一番違和感のない表現でしょうか。

同じ主に仕えながら、お互い突っ込み突っ込まれしつつ、本気で嫌い合っている訳でもない、まあそんな所でしよう。そういう事におきましよう。畜生にそこまで興味無いし……。

と、思ってたら、むに！！お前！！そんな美少女だったのかつつ！！！！

その日、眷族達に衝撃が走りました。そう、デビューから一年近くの時を経て、この畜生は得てしまったのです。「変身すると実は美少女」属性を。しかも胸が大きい。

先程「何が我々を惹きつけるのでしょうか」なんて勿体ぶった言い方をしましたがそんなもの答えは決まっています。

でかい胸です。

僕が勝手にそう思ってるだけじゃありません。嘘だと思えばTwitterを開いて#むにぴくで話題のツイート順で表示してください。そこに答えはあります。Q.E.D

……脱線しましたが、この女体化を経てむにはサブヒロイン的な魅力を獲得しました。

メインヒロインたるゆに様との大きな違いはその畜生さです。ちよつと語弊がありますが性格の悪さやズルさと言い換えても良いでしょう。

それまでの動画でそうしたむにのそのキャラクター性は眷族達に知られていますから、当然のごとくそれは美少女化したむににも引き継がれます。

ちよつとおばかで抜けてるけど、スタイルが良くて自分の可愛さや武器を理解している実は人外で性格が畜生な女の子……急に属性てんこ盛りの欲張りキャラクターになってしまいました。

なんだか妄想が膨らみますね。

先程同僚という言葉が出ましたが、同僚にも先輩後輩といった概念はあるでしょうし、ましてやむには人外、性格が与えられたのが後からだったとは言え、

最初期から存在したむにとって、眷族は後輩かつ下等な人間ということになり、きっとこちらの事を下に見ています。許せませんね。

一方の眷族はと言えば、むにの元々の畜生時代を知っていますから、何を言われても「所詮畜生」となる訳です。このお互いの認識のねじれ構造が、また物語性を秘めているように思います。

例えば、美少女むにが眷族をからかったり誘惑したりするシーンはTwitterのえっちピクチャやえっちツイートでは一般的に見られる光景なのはよく知られていますが、

その動機として、むにが本当に眷族の事を好きだったりするパターンは少ないでしょう。

どちらかと言えば、ゆに様に可愛がられているのが気に食わないとか、色仕掛けで騙して面倒ごとを代わりにやらせたいとか、あるいは……「快楽に屈服する様が見たい」とか。

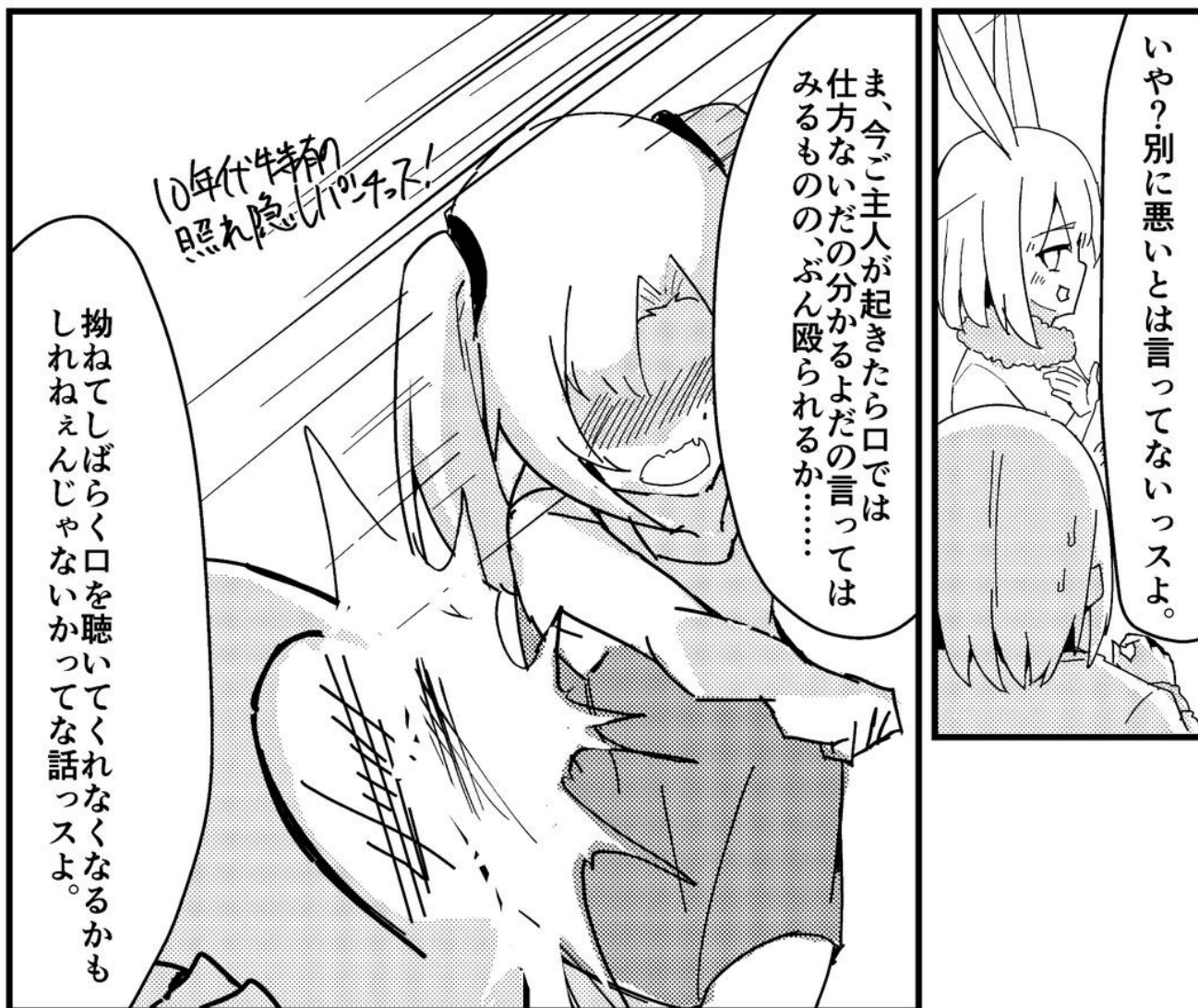
目次

P8～ 鳴坂ブロンズ

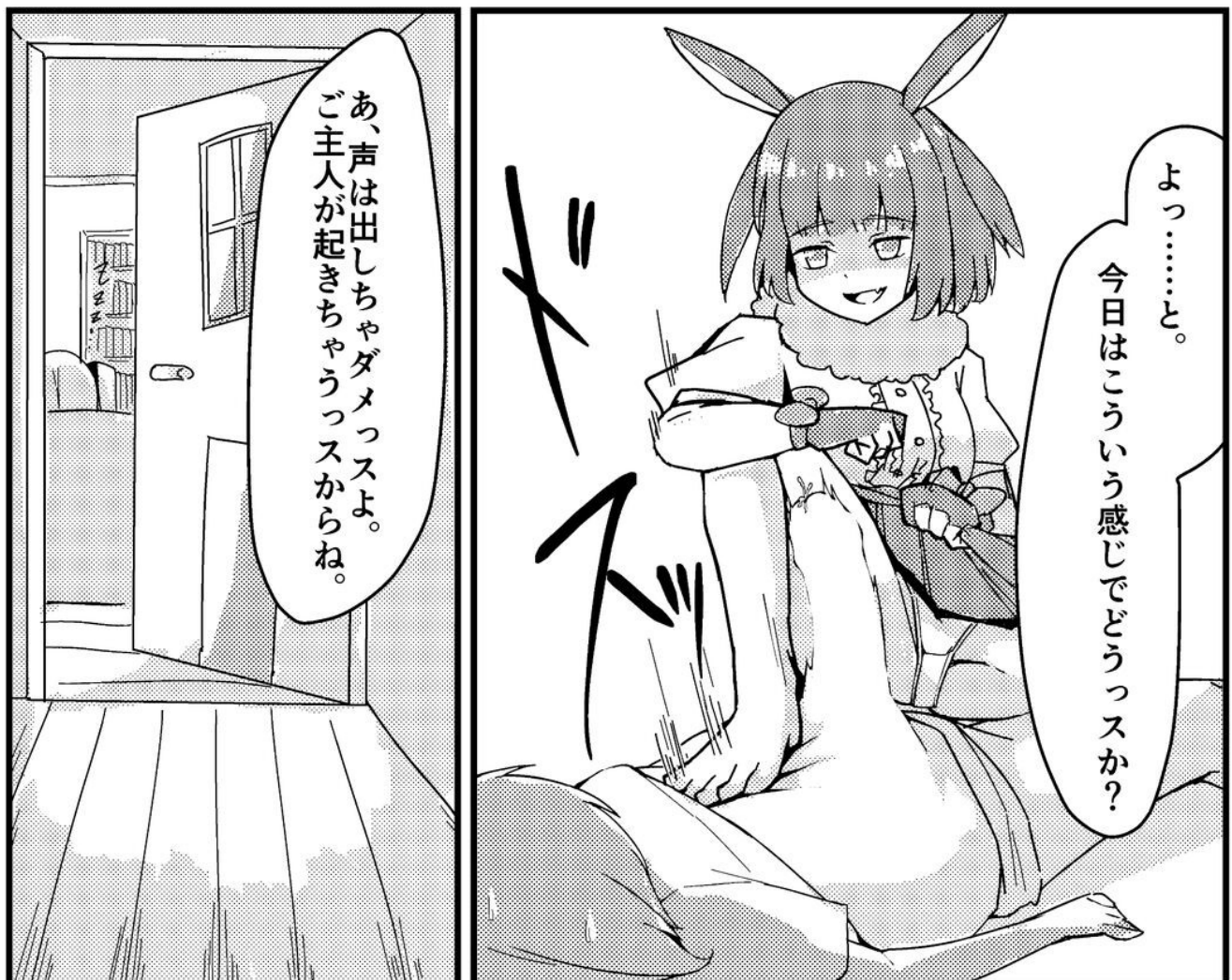
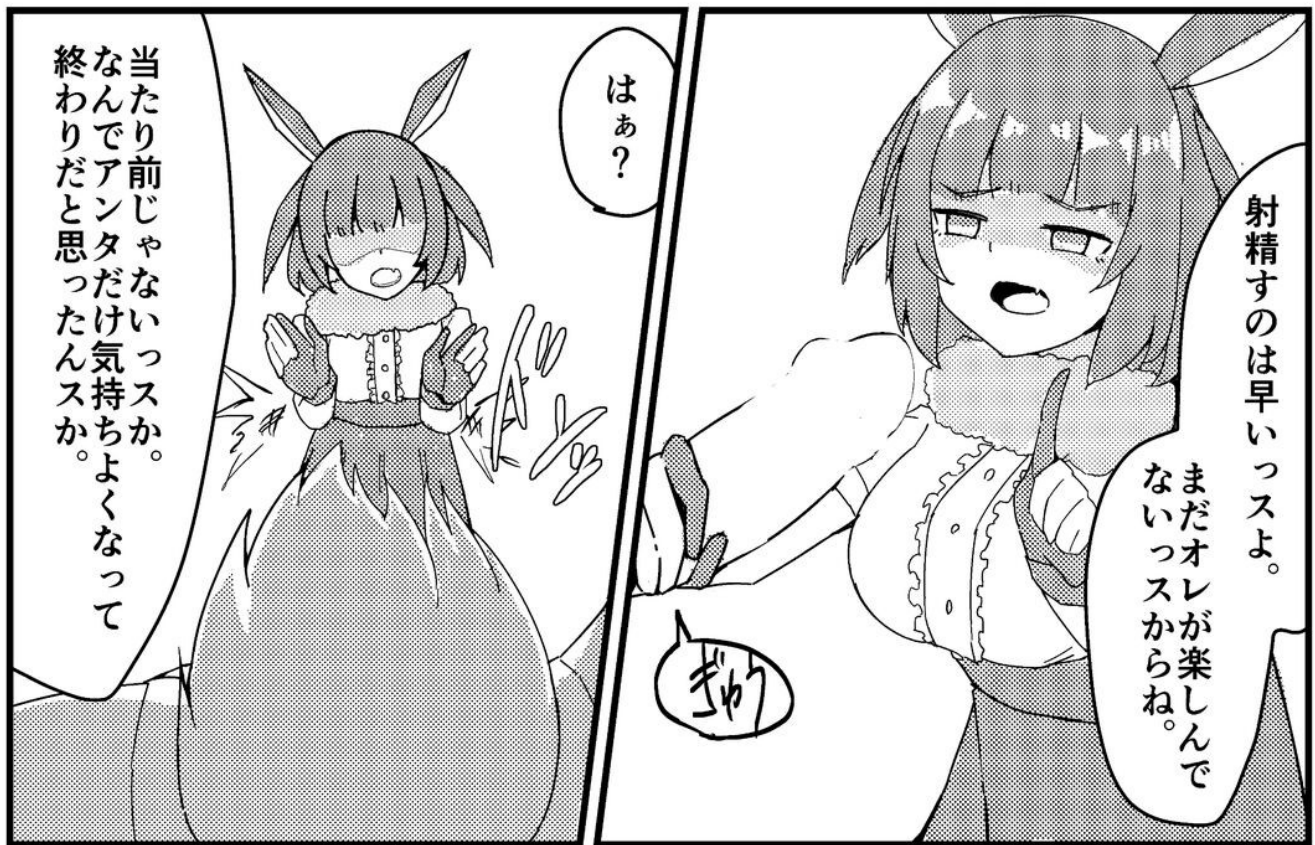
P15～ 幾崎ふあん

P20～ 灯笠









へへっ、お腹踏まれてるのに
手の時よりでかいのは
どういふことなんスかねえ？

アンタ、やっぱり
マゾヒストって
やつなんスか？

アンタの腹とオレのナカと、
交互に叩きつけられるのは
どういふキモチなんスかねえ

お、もう射精そうっスか？

いいっスよ。
ご主人がいつ起きるか
分からねえっスからね

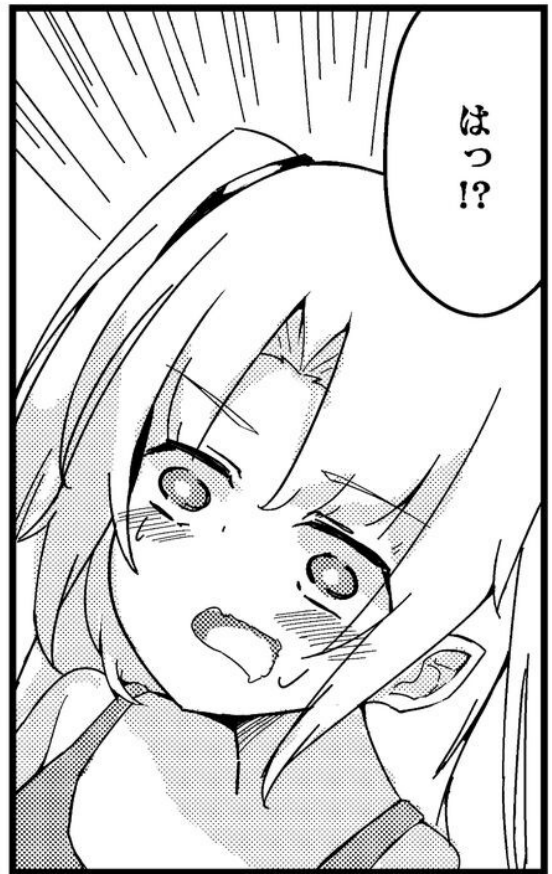
お？パレるかもって
言った途端に激しくなるのは
どういうアレなんスカねえ!?

あ、ひよっとして
そういうシチュが
お好きな感じっスか？

アッハハハ!!アンタ、
ほんつとにつくづく……
救えねえヤツっスねえ!

オラっス!
ご主人にできないこと、
畜生まんこにぶつける
畜生ちゃんぽ野郎が!

畜生は畜生らしく
腹踏まれて無様に
ぶちまけろっス!



むにがいたずらをしようする話

作..幾崎ふあん

「で、結局ご主人とはどこまでいったんスカ？」

口から思いつき緑茶を吹き出した。予想外の一撃にせき込みながら、言葉を吐き出した張本人をジトつとした目で睨みつける。

「そんなこと知ってどうしようっていうの？」

「いやー、恋人との赤裸々な情報を聞き出してからかうとか、あわよくばご主人をゆす……いやいざという時の交渉材料に……まあまあ、いいじゃないっスカ。それでどうなんスカホントのところは……？」

にしし、と底意地の悪い笑みをしてこっちの様子をうかがうむに。珍しく人の姿をして玄関からやってきたかと思えば、当たり前のように上がり込みベッドに座っていた。

「教えない」

「えー、オレとお前の仲じゃないっスカー。ほらクッキーあげるっスよクッキー」

ほれほれと胸元に手を突っ込んで綺麗にラッピングされた小袋を取り出す。

……おいまでどこからそれ取り出した。

持てる者の特権を妬みつつ私もむにの隣へ座ると、袋を受け取り一枚引っ張り出す。やや不格好ながらも綺麗な焼き色をしたクッキーが姿を現した。ほんのり暖かいのは焼き立てだからだと、そう思うことにしよう。

「むにの手作り？」

「そうっス。味は間違ってないっスよ」

あとでご主人にも分けるんスよと、後ろから伸びたむにの手が一枚、また一枚と中身を持っていく。早く食べない

と無くなる。あわてて私も一枚口に入れる。

おお、美味しい。サクサク砕ける中にほんのりと香るアルコール。ブランドーとか入っているんだろうか。

「で……結局どうなんスカ……？」

いいじゃないっスカいいじゃないっスカと繰り返される言葉。頭の中で妙に反響するその言葉が不思議と心地良くて、つい口を滑らせてしまった。

「……ちゅー、だけ」

「遅いっス！ 遅すぎるっス！」

私の発言を聞いたむにが勢いよく後ろに倒れる。ぎしっ、とベッドのスプリングが軋む音……ご近所迷惑になるからやめてほしい。六畳一間格安賃貸であるこの壁はびっくりするくらい薄いのだ。深夜の騒音トラブルは御免蒙りたい。

「その時はその時でこっちに来ればいいじゃないっスカ。ご主人だって喜ぶと思うっスよ」

ゆにちゃん様と同棲……うあ。考えただけでかあつと顔

が熱くなってきた。精神が持ちそうにない。

「番になったところで子供ができるわけじゃないんスカから、好きなようにやることやればいいんスカよ。あの陰キャ引きこもり堅物吸血鬼のペースに合わせてると一生そのままで終わっちゃうっスよ」

したり顔の前にびんと人差し指を立てたままそれをくるくると回すむに。自分の主になんていいようだ。あとでゆにちゃん様に言いつけてやろう。

「いやでもゆにちゃん様がそういうことを望んでないのに行くのはちよつとね……もっと関係性を大切にはぐくんできたいというかなんというか」

「甘い、甘いっスよ人間。ご主人なんて所詮『初心なねん

ね』っすから、ちょっと押し倒してあげればあつという間にコロッとイッちゃうこと間違いなしっすよ？ ツンチョロの壁は超えたんだからここまで来たらもうイージーモードっすよイージーモード」

「今やらないでいつやるんすか！？ 今っすよ今！」

声高に、でも近所を気にしてやや控えめに声を出すむに。「ということでオレも色々考えたっす。ご主人をもうちょっとからかう……もとい、素直にする方法を」

「これでも使い魔っすからねとたわわな胸を張るむにだけど、今からかうって言ってたよね。ゆにちゃん様、あなたのところの使い魔なんか悪いこと考えてますよ。」

「このむに印の媚薬を一服盛るっす。色んな材料を怒られない程度にブレンドして作り上げたこの一品。ひま……協力者のおかげもあってその効果は折り紙付き、知恵の実を超えサテュリオンに迫るとオレの中で評判っす！」

勢い込んで主張するその姿はいつも以上にテンションが高い。さっきのクッキーで酔いでも回ったんだろうか。私もなんだかさっきからばかばかふわふわしてるし。

私もむにもそこまで弱いわけではなかった気がするけど。

「それで、その媚薬はどこに？」

「それはもちろんここに……あ」

むにが見せつけるように胸元に手を入れてごそごそとラッピングされたさっきのクッキーとよく似た袋を取り出し、そのまま目を点にして固まった。

「むに？」

「……ここにあるっす」

そう言って指さしたのはさっきまで食べていたクッキーの袋……おい待てまさか。

「ちよっと用事を思い出したから失礼するっす！」

明らかに逃げようとベッドから立ち上がるむにの腕を掴んで引き戻す。

「このままゆにちゃん様に引き渡されるのと、私に引ッ叩かれてからゆにちゃん様に引き渡されるのと、どっちがいい？」

「どっちも同じじゃないっすか!？」

じたばたと暴れるむにを上から押さえつける。振り回される腕からふわりと漂う甘い香りと時折触れる柔らかな感触に、胸の鼓動が速度を増していく。

むにって普段からこんないい匂いしてたっけ？ もっとこう、干からびた砂糖みたいな匂いじゃなかった？

「まー、ご主人用に調整したから人間に使ったらちよっと効きすぎるかもしれないっすねえ。命にかかわるようなこととはないっすから……あとは自分で慰めるといいっす」

「自分でってそんな……あ、こらっ」

言い終わるや否や私の拘束をするりと抜けてベッドから滑り抜けていくむにが、そのまま部屋から逃げ出そうとして――、

「ひゅあ!？」

ぺたんと扉の前に座り込んだ。

「からだ、なんかしびれて立てないっす……」

「そうだよ、むにも食べてたもんね、クッキー。」



深夜とはいえこの季節はまだ冷房が欠かせない。いつもなら時折ごうごうと唸るエアコンだけがBGMとして部屋を彩るのだが、今日はその音とは別にぐち、ぐちやと粘ついた音が響いている。

「あつ、ぎつ、ぶるつ、まっ、でえつ、」

後ろから抱きかかえるようにむにの体を優しく撫でまわす。最初のうちは弱弱しく抵抗していた吸血鬼の使い魔も、今はすっかり私の動かす指に合わせて喘ぎとも言葉ともつなかない音を口から漏れ出すだけになっていた。

赦して、待って。

多分そんなことを言いたいのだろう。私は優しいので言われた通りに手を止めてあげると、ぐつたりと力を抜いて私に体を預けてきた。背にした壁の硬さと反比例するむにのむにむにした体が心地いい。

ぐつたりと力の抜けた膣内から指を引き抜くと、ふやけた指がどろりとした糸を引いて姿を現す。

まあ、むにはむになりになりと私とゆにちゃん様のことを気にしてくれていて、むになりのかえがあつたからこそこんないたずらをしようとしたのかもしれない。それは素直に喜ぶべきことだ。

だけど無理矢理はよくないよね、無理矢理は。

「だからこれは、お仕置き」

「なんでそっちは、大丈夫なんスカあ……」

膣内のものが抜けて落ち着いたらしく、息を乱しながらも言葉を取り戻すむに。

「吸血鬼向けで人間向けじゃなかったから？」

いつもより敏感になっていたり、体が熱くなっていたり、ちよっと思考が茹ったりしているしているけど、それでもまだ大丈夫。

でも、私の指で快楽に震えるむにの姿を見てるといつもとはちよつと違った感情が湧き上がってくるのも事実。

ブラウスの胸元にあるボタンを外し、開いた隙間へ手を突っ込む。重量のある塊が手の中でぐにぐにと形を変えて

いく。

「むに……ブラは？」

「あれ暑いしきついし蒸れるんスカよ……お前とかご主人にはあんまり関係ないかもしれないっスけどね」

それにしたって中にインナーを着るくらいはしてほしいというか私だって関係あるし。大変だよ、重いし熱こもるもんね。わかるよ、わかる。わかるもん。わかるってば。

「ちよつと、あつ、そこ、やめつ、何で急に、撮むのは無しっス!？」

嫉妬とかではない。別にこのもちもちが羨ましくなんかないわけじゃないからね。

「普段からつけないと形くずれるよって言ってるのに」

「ここに来るだけだから、んっ、別にいいと思ったんスカ……途中誰かに見られるわけでもないっスからね」

それはつまり私に見られるくらいならいいということだろう。むにむに。

「……いつまで触ってるっスカ？」

「むに、私は思うんだよ。持つ者は持たざる者へ施しをするべきだと。つまり力には責任が伴うと」

むにむに。もちもち。

「いや別に減るわけじゃないからいいっスけど……」

「ほら見てこの下乳すっごい汗」

「それはさすがに変態っぽいだべっ、だからそこは摘まんじゃダメっス！ 刺激してもおっぱいは出ないっス！」

それはそうとさっきから下着がぐしょぐしょで気持ち悪い。ジャージごと指をひっかけて下におろそうとしたけど、さすがに座った状態のままだと脱げるわけもなく。

「ほらむに、ちよつとそっち横になつて」

脱力したむにの体を押すようにしてカーペットの上に寝

転がせる。その隣に私も横になり、今度はすんなりと下を全部脱ぐことに成功した。

「うわあ……べったべた」

むにのスカートの中に再度手を入れ、下着をずりおろす。抵抗はしないまでも自分から動くこともしないおかげで太ももまでしか下ろせなかったけどまあいいか。

さっきよりも開放的になった秘所に指を再び潜り込ませる。周りより幾分熱のこもったそこは、私の指を感じると吸い付くように収縮を始める。

「も、もう勘弁してほしいっす。さっきからもう体に力はいらなくなってるっす」

「ちゃんと反省してる？」

「してる、してるっすから……」

「じゃあごめんなさいって、ちゃんと謝ってね。そしたらやめるから」

「わかったっすごめんな、さあつ、あつ、あゝ」

硬くなった陰核を撫で上げると、びくびくと体を震わせながらどろりとけた言葉が口から溢していく。

「ちゃんと見えなかったからもう一回」

「ご、ごめんなざざい♡」

「もう一回」

「ごめんなざざえ♡」

むにが口を開こうとするたびに、秘所を掻きまわし、陰核を撫で上げる。ちよつと楽しくなってきたしまったかもしれないと何度か続けるうち、すっかりふやけた指に今まではどこか違う生温かい液体がかかった。ほのかに漂いだす刺激臭。ちよつとやりすぎたらしい。

「ごめん……」

「うう……辱めを、受けたっす……」

★

「で、どうなんスカ最近」

一服盛られてからというものの、徐々にむにが少女の姿で来る頻度が増えつつある気がする。あんなことした後なのに言動がいつもと全く変わらないのは畜生故か。冷静になって謝ったとはいえない思ひ出すと洗濯物が増えるからこつちとしてはよろしくないのだけど。

「どうと言われても……」

人間はそんなにすぐ変化しないから人間なのであってすぐに変化する人間は人間らしからぬと思わないだろうか。

「オレにはあそこまでやっというてご主人にはなんもしないんスカ、心だけの関係っスカ!？」

「むしろあんなことをしちゃったからより慎重になったというかなんというか……」

ゆにちゃん様におんなじことをやっちゃうかもしれない自分がちよつと怖い。

「前途多難っスねえ」

そんな益体のない話をしながら、むにはまた胸の谷間に手を突っ込み、見覚えのある小さな袋を取り出す。なんだ、胸は育つと次元を超えるのか？

「ん？ 喰うっスか？」

少し前の記憶が脳裏を過ぎる。人の手から与えられる制御不能の快楽、このまますべてを投げ出してもいいと一瞬でも思ってしまうような桃色の閃光。

思い出しただけでも脳髓がじわりと溶け出すような甘い感触を振り払い思考を切り替える。

「……今度こそ大丈夫なら」

「問題ないっすよ。今度はちゃんと――」

むにが言いかけたところで部屋の中に響く電子音。

「あ、ちょっと待ってね、ゆにちゃん様からだ」

液晶に表示された主の名前をタップすると、すぐに向こうから声が聞こえてきた。

「ごめん、眷族。こんな時間に悪いんだけどっ……っ！ ちよつと、かい、んっ、買い物……お願いしてもいい……かな」

「それはもちろん大丈夫です……でもゆにちゃん様、呼吸が荒いみたいですけど大丈夫ですか？」

「だい、じようぶ……たぶん、すぐ良くな、あつ、るから……んっ！」

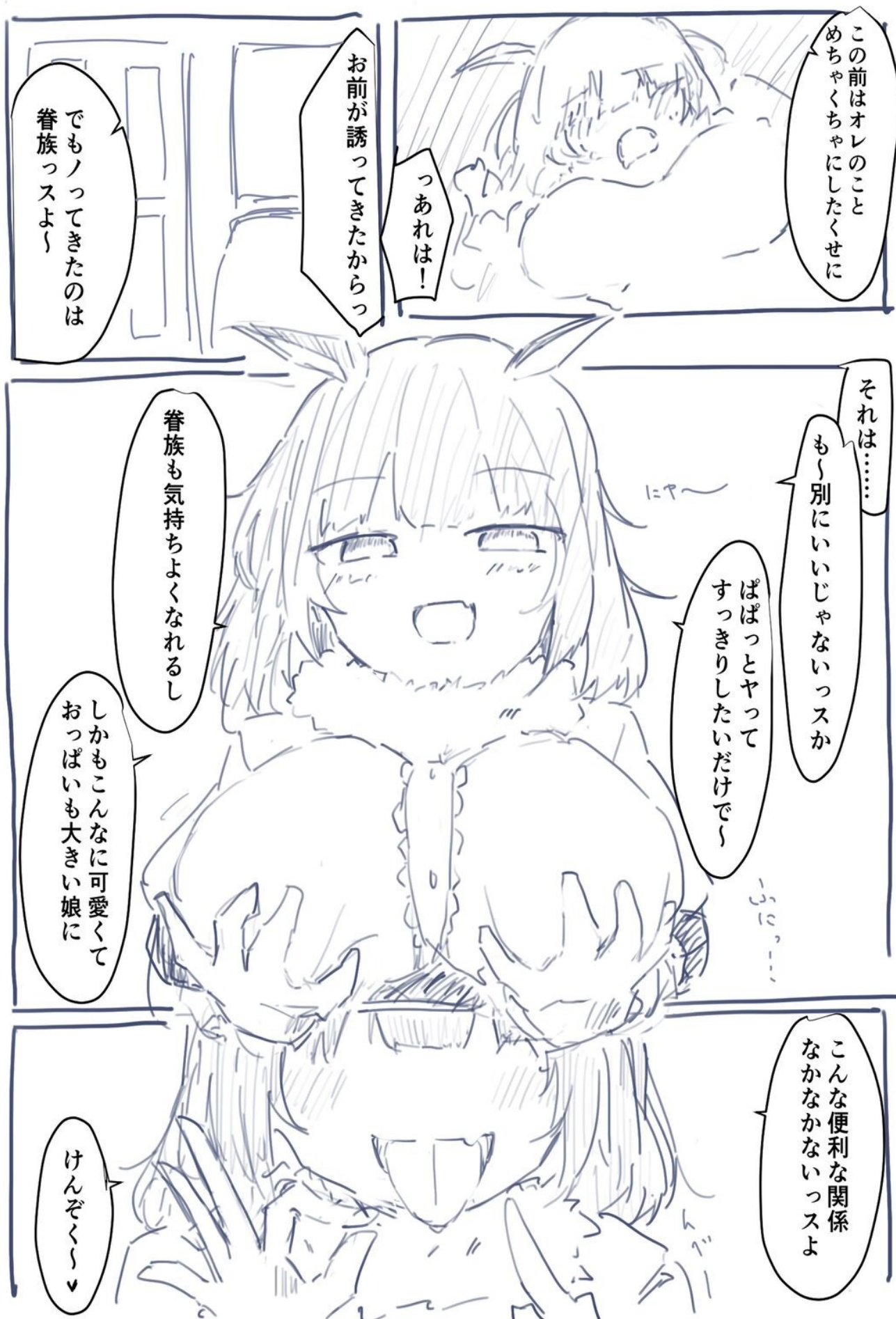
どう聞いても大丈夫には聞こえないんですけど……ただ体調が悪いのはちょっと違うような、具体的に言っていると吐息が疊惑的過ぎるような。

とりあえずすぐ向かいますと電話を切って、身支度を整えようとバタバタしているとむにがにやりとした顔をしているのに気が付いた。そして。

「ちゃんと一服盛ってきたっすからね！」

むにはそう言っただけで、拳を突き立てた。

これはまた、お仕置きしないとだめかなあ。













絶対もっと遊んでやろ
と考えている

あとがき 

ネオちゃん、 @neo_chapno

0勝3敗、対ありでした。

鳴坂ブロンズ @Narusaka Bronze

忘れ物、忘れ物っス！

あれ？人間、まだいたんスね。

ん？なんスかこの匂いは？

これは、(中略)じゃあ、今から脱ぐっス！

幾崎ふぁん @remi-fla-jinsei

自分で書いたモノでは致せないのではと思ったのでミラーワールドからさきいきふぁんさんを引っ張り出し代打を頼みましたこれで安心していただけますのでこれを書いたのは幾崎ふぁんではないんです本当です信じてください。あ、用事の済んださきいきふぁんはちゃんと山に還しておきました。

灯篭 @hgs_bi

今回むににはあえて「眷族♡」と呼んでももらいました。

おっぱい大きくて好きです。

殺さないでください。

終